

# 学校健診における知的障害児への視覚支援 —養護教諭への「伴走型支援」による ICT 教材作成の実践—

山口 拓哉（福岡市立屋形原特別支援学校）

立石 力斗（近畿大学九州短期大学）

Visual Support for Mentally Retarded Children in School Examinations  
—Practice and Consideration of ICT Material Creation with accompanying Support for School Nurse Teachers -  
Takuya Yamaguchi(Fukuoka City Yakatabaru Special Needs School)  
Rikito Tateishi (Kyushu Junior College of Kindai University)

## 要旨

ICT 活用に不安がある養護教諭が、学校健診における知的障害児への視覚支援に取り組んだ。ICT 自主研修会の内容を踏まえて、取組の当初は著者と養護教諭が協働して作成した。学校健診の回数を重ねるにつれて、養護教諭が検診内容等に応じて視覚支援を改良するようになった。作成した視覚支援は学級担任に共有し、児童生徒が見通しをもって安心して学校健診を受けることを可能にし、校内全体の支援の質の向上に寄与した。

キーワード：特別支援，視覚支援，養護教諭，ICT 活用，伴走

## Abstract

A school nurse who had concerns about using ICT worked on providing visual support for children with intellectual disabilities during school health checkups. Based on the content of an ICT self-study workshop, at the beginning of this initiative, the author and the school nurse worked together to create the visual support materials. As the number of school health checkups increased, the school nurse began to improve the visual support depending on the checkup content, etc. The visual support created was shared with homeroom teacher, which enabled students to attend school health checkups with peace of mind and a sense of foresight, contributing to improving the quality of support throughout the school.

Keywords : visual support, school health teacher, ICT integration, collaborative practice

## 1. 問題と目的

### 1) 知的障害特別支援学校における ICT の活用

GIGA スクール構想の推進により、教育現場における ICT 活用は急速に普及している。特に教育的支援を必要とする子どもの ICT 活用は教科学習の活用にとどまらず、困難さを補い、主体的な活動を支える上で不可欠な役割を担っている。

具体的な活用例として、意思伝達の支援が挙げら

れる。子どもたちの中には、発語に困難さがある子がいる。子ども自身が意思表示をする際に、写真や絵カード、シンボルなどを指差したり、VOCA(Voice Output Communication Aid)として活用したりすることで自らの意思を表現する場面は少なくない。教員が意思伝達する場面においても、言語情報だけでなく、同様に視覚的な手がかりを用いることで児童生徒の理解を促している。見通しをもって活動に取り組むことで安心して学習に臨むことができる

場面も多い。ICTを用いて、1日の学習や、1時間の授業の流れを視覚的に提示することは、情緒の安定に繋がる効果的な支援でもある。

このように、教育的支援を必要とする子どもたちへのICT活用は、単なる学習ツールとしての側面だけでなく、一人ひとりの困難さを軽減・改善し、その有する能力を最大限に引き出すものとして位置付けることができる。

## 2) 養護教諭のICT等の活用状況

前述したようにICTを用いた視覚支援は重要であるものの、その活用は教員のスキルに依存し、すべての教育場面で一貫して実践されているとは断言できない。

GIGAスクール構想を基盤とした令和の日本型学校教育の姿の一つとして、障害のある児童生徒への支援の充実が挙げられている。養護教諭及び栄養教諭の資質能力の向上に関する調査研究協力者会議(2023)は「養護教諭及び栄養教諭においても、これらの教育全体の方向性の中で、その専門性をより発揮するためのICT活用が重要」と述べている。また、陳ら(2023)は「認知特性に応じた対応に関する専門性を一層高めることにより、心理的問題に対応する専門的役割を果たすことができる」と述べている。これらのことから、養護教諭もICTを児童生徒の教育的支援として活用することが求められている。

## 3) 本研究の目的

そこで本研究では、ICT活用に不安がある養護教諭に対して、著者との協働による研修や教材作成、思考の手がかりの提供、サポートを行う「伴走型支援」を実践する。この支援を通して、養護教諭が自ら学校健診<sup>注1</sup>の場面での有効な視覚支援教材を作成・活用できるようになることを目指した。そして、その実践を通して、教育的支援を必要とする児童生徒が安心して健診を受けることができる校内体制の構築、学級担任との連携強化による校内全体の支援の質の向上に寄与することをめざした。

## 2. 方法

### 1) 対象

本研究は、知的障害部門と病弱教育部門を有する特別支援学校を対象とした。

対象とした特別支援学校には、2名の養護教諭（養護教諭A：養護教諭歴15年、養護教諭B：養護教諭歴1年）が所属していた。養護教諭2名は、年度当初に実施した文部科学省(2018)の「教員のICT活用指導力チェックリスト」において、表1のように回答していた。養護教諭が中心となって運営する内科や歯科等の学校検診は、児童生徒にとって非日常的な環境であり、不安や混乱を招きやすい場面である。そのため、ICTを用いた視覚的な支援が有効である可能性が想定された。しかし、養護教諭のICT活用に関する不安もあり、効果的な視覚支援が提供されているとは言えない状況にあった。

実際に、研究を行った前年度までは健診の流れを記した絵カードを保健室前に提示するに留まっていた。この方法は、児童生徒が見通しをもつための支援としては充分とはいえず、健診の場でパニックになる児童生徒への対応が大きな課題となっていた。さらに、その掲示物は、各学級で事前に行われる指導と内容や教材が連動しておらず、学校全体の体系的な支援としても機能しているとは言い難い状況だった。

### 2) 研修の概要

本研究における介入として、第一著者が講師となり、教員向けのICT活用に関する自主研修会を実施した。研修会は5月より週1回、15分間の短時間形式で設定し、表2のように研修計画を立てた。なお、この研修会自体への参加は全教員を対象としているが、参加は希望制とした。本研究では、この研修会に参加した前述の養護教諭2名を研究対象とした。

### 3) 視覚支援教材の構想

著者と養護教諭の協議の上、対象とした特別支援学校に整備されているICT環境を踏まえ、視覚支援教材の具体的な方針を決定した。

まず、使用するアプリケーションはiPadに標準インストールされており、教員の活用頻度も高いことからKeynoteを採用した。教材に用いるシンボルは、特別支援教育で広く活用され、校内でも日常的に使用されて児童生徒にも馴染みある「ドロップス」を選定した。「ドロップス」は保健室関連のシンボルが豊富に用意されているため、複数の検診に対応する上で適していることと、校内のiPadにイ

## 学校健診における知的障害児への視覚支援

ンストールされているアプリケーションの DropTap からシンボルを検索したり選択したりすることが容易であることも理由である。

次に、作成した教材の共有と提示の方法を定めた。第一に、校内の連絡ツールである Google Classroom を用いて、作成した Keynote 教材を全学級担任に共有することとした。これにより、各学級での事前指導と保健室での支援で用いる教材が統一され、一貫性のある指導を行うことができる。第二に、保健室前のテレビモニターを活用し、各検診の全体の流れと個々の手順をスライドショー形式で提示することとした。この方法は、多様な認知特性をもつ児童生徒が、それぞれのニーズに合った

形で情報を得られるようにすることを目的としている。また、教室で見たものと同じ教材を提示することで、検診直前の最終確認としての効果も意図した。

### 4) Keynote 教材の作成プロセス

Keynote 教材の作成は、養護教諭が最終的に自立して製作できることをめざし、段階的なプロセスを踏んで進めた。

まず、最初の検診に用いる教材は、養護教諭から前述した内容に関する意図や考えをヒアリングした上で、第一著者が手本として作成した。その際、作成手順を一つひとつ解説し、研修で学んだ機能を盛り込み、2回目以降に養護教諭自身が作成するプ

表 1 養護教諭の属性と ICT 活用指導力チェックリストの結果

A 教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力	できる	やや できる	あまり できない	できない
A-1 教育効果を上げるために、コンピュータやインターネットなどの利用場面を計画して活用する。				A B
A-2 授業で使う教材や校務分掌に必要な資料などを集めたり、保護者・地域との連携に必要な情報を発信したりするためにインターネットなどを活用する。			B	A
A-3 授業に必要なプリントや提示資料、学級経営や校務分掌に必要な文書や資料などを作成するために、ワープロソフト、表計算ソフトやプレゼンテーションソフトなどを活用する。			B	A
A-4 学習状況を把握するために児童生徒の作品・レポート・ワークシートなどをコンピュータなどを活用して記録・整理し、評価に活用する。			B	A
B 授業に I C T を活用して指導する能力				
B-1 児童生徒の興味・関心を高めたり、課題を明確につかませたり、学習内容を的確にまとめさせたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。				A B
B-2 児童生徒に互いの意見・考え方・作品などを共有させたり、比較検討させたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して児童生徒の意見などを効果的に提示する。				A B
B-3 知識の定着や技能の習熟をねらいとして、学習用ソフトウェアなどを活用して、繰り返し学習する課題や児童生徒一人一人の理解・習熟の程度に応じた課題などに取り組みさせる。				A B
B-4 グループで話し合っって考えをまとめたり、協働してレポート・資料・作品などを制作したりするなどの学習の際に、コンピュータやソフトウェアなどを効果的に活用させる。				A B

※A：養護教諭A B：養護教諭B

## 学校健診における知的障害児への視覚支援

プロセスを具体的にイメージできるように支援した。さらに、今後の作成作業の負担を軽減し、かつ児童生徒に提示する手順の型を統一するため、シンボルの差し替えが容易で、文字情報を最小限に抑えた汎用的な図 1 の左上と右上のテンプレートを準備した。

2 回目以降の各健診では、養護教諭が主体となり、テンプレートを用いて教材作成を行った。第一著者はその作成過程について進捗を尋ねたり、質問に応じたりしながら、伴走型支援に徹した。歯科検診では、椅子に座ることが難しい場合を想定して、イラストを挿入している。さらに検診に対して安心感を抱くことができるように 15 秒程度の動画を挿入した教材を作成した。助言が特に必要となった場面は研修では取り扱っていない内容だったため、都度技術的な助言を行った。

### 5) 視覚支援の実際

視覚支援を行なった検診は、耳鼻科検診、歯科検診、眼科検診、心電図検査の 4 つであった。心電図

検査のみ小学部 1 年生、中学部 1 年生、高等部 1 年生を対象として、それ以外の検診は校内の全児童生徒を対象に行なった。

### 6) 調査と分析の方法

前述した検診が終わった後に、校内の支援の質の向上に寄与できたかを養護教諭と著者が分析するために、各学級担任 1 名にアンケート調査を行った。アンケートでは、①学級における Keynote 教材の活用状況、②視覚支援全体に対する評価、③視覚支援の評価理由について回答を求めた。①は「使った」「使っていない」の 2 つの選択肢から回答を求めた。②は「良かった」「まあ良かった」「どちらとも言えない」「あまり良くなかった」「良くなかった」の 5 つの選択肢から回答を求めた。③は自由記述による回答を求めた。①②については回答数の単純集計を行った。③については、記述内容による回答内容の分類を行った。

また、「伴走型支援」の対象とした養護教諭 2 名を対象に、202X 年 8 月に半構造化された形式でイ

表 2 ICT 活用指導研修会への参加状況

研修回	研修内容	養護教諭の参加
1	☆ iPadのマイク、音声入力、文字の拡大	A・B
2	☆ Keynoteに画像貼り付け、背景削除	A・B
3	i+PadタッチャーとマウスでiPad操作	A・B
4	Mabeeeでおもちゃを遠隔操作	
5	Canvaでプリント作成	B
6	Chat-GPT入門講座	
7	☆ Keynoteでこそもの支援教材作成アイデア	A・B
8	VOCAアプリ「たっち&びーぷ」でコミュニケーション	A・B
9	VOCAアプリ「DropTap」でコミュニケーション①	
10	アクセシビリティ「アクセスガイド」「アシスティブアクセス」	A・B
11	VOCAアプリ「DropTap」でコミュニケーション②	A・B

※A：養護教諭A B：養護教諭B

※☆：Keynote教材作成に必要な要素を含んだ研修

## 学校健診における知的障害児への視覚支援

インタビュー調査を実施した。養護教諭 2 名は、アンケート結果を参照した上で回答している。所要時間は 30 分程度で、インタビュー内容は同意を得て録音し、文字起こしを行った。インタビューでは、答えたくない質問に無理に応じる必要がないことや自由に思いを語ってもらえること等を含め研究の

趣旨を確認し、同意を得た上で開始した。インタビューの質問項目を表 3 に示した。

### 3. アンケート結果

#### 1) 学級担任へのアンケート

学校健診がすべて終了した後、校内の支援の質の向上に寄与できたかの評価を目的として、学級担任



図 1 視覚支援のテンプレートと歯科検診時の教材

## 学校健診における知的障害児への視覚支援

を対象としたアンケート調査を実施した。対象学級39学級のうち、38学級(97.4%)から回答を得ることができた。アンケートの質問項目と回答結果を図2に示した。

### ① 学級におけるKeynote教材の活用状況

事前にGoogle Classroomで共有したKeynote教材を学級で活用したか尋ねた。その結果、「使った」と回答した学級は18件(42.7%)、「使っていない」と回答した学級は20件(52.6%)であった。

### ② 視覚支援全体に対する評価

保健室前のモニターや共有したKeynote教材の視覚支援全体について尋ねた。その結果、「良かった」が23件(60.5%)と最も多く、次いで「まあ良かった」が8件(21.1%)であった。これらを合わせた肯定的な評価は31件(81.6%)であった。その他の回答は、「どちらとも言えない」が6件(15.6%)、「良く

なかった」が1件(2.6%)であった。

### ③ 視覚支援の評価理由

視覚支援の評価理由について自由記述形式で尋ねた(任意回答)。この質問には回答した38学級のうち34学級から有効な記述があった(89.4%)。

主な意見は肯定的な評価理由と、課題・改善点、対象児童生徒にとっては不要だったものに大別された(表4)。

肯定的な意見の中で最も言及されたのは、「見通しをもつことができた」点であった。「生徒が、廊下や検診中に待つ間、視覚支援教材を見ることで、落ち着いて行動することができた」「見通しをもつことができ、生徒が主体的に移動等を行うことができた」「教室のプロジェクターで表示した手順を見ながら検診の練習を行うことができ、子どもたちの安心感に繋がった」が具体的な記述にあった。また、

表3 質問項目

<b>【実践前について】</b>
・ ICTの活用全般に対して、どのような意識をもっていたか
・ 昨年度までの学校健診での課題は？(Aのみ)
・ 研究実施者と一緒にICT教材を作成していく話があった時、どのように思ったか
<b>【伴走型支援のプロセスについて】</b>
・ 最初にKeynote教材を作成したときに覚えていること、印象に残っていること
・ 教材作成はスムーズだったか？難しい点はなかったか？
・ 難しいと感じた点
・ テンプレートは教材作成の助けになったか
・ 実践を重ねる中で、自信をもつようになった時期やきっかけがあったか
<b>【実践後の成果と課題、実感したこと】</b>
・ 子どもたちの反応をみて、どう感じたか
・ 今回の実践を通して成果と感ずることは何か
・ Google Classroomで学級担任と教材を共有したことで、動きやすさや連携のしやすさに変化はあったか
<b>【今後の課題と展望】</b>
・ 今回の実践を踏まえて、学校健診の支援において改善したい点や課題と感ずる点
・ 今後このような教材を作りたいというアイデア
・ ICTの活用苦手意識をもっている養護教諭がいたらどのようなアドバイスをするか

## 学校健診における知的障害児への視覚支援

教材の統一性に関する利点も複数指摘された。例えば、「教室で使用する教材と、保健室前に提示する教材が一致していることで、本番と同じ流れで練習を行うことができた」という内容の記述であった。さらに、「保健室前の待ち時間に、担任が生徒に再

度説明ができることに加えて、担任も見通しをもつことができた」という支援者側の負担軽減や理解促進にも繋がっていたことが示唆された。

一方で、視覚支援が全ての児童生徒に有効に機能したわけではないことも示された。課題として、主に以下の2つが挙げられた。1つ目に、視覚支援が意図せず負の刺激になった可能性である。「検診が苦手な児童は、モニターがあることで、不安になっている様子が見られた」という回答や、「歯科検診の際の動画が気になって、その場を離れ難くなった」という記述があり、提示方法や内容が逆効果になった事例も示された。2つ目に、教材を提示する環境面の課題である。「通信環境の問題かもしれないが、教室で使用できなかったことと、モニターに児童が触りそうになり、少し危険性を感じる。高い位置に壁掛けられると安心である」といった安全面に配慮した回答があった。

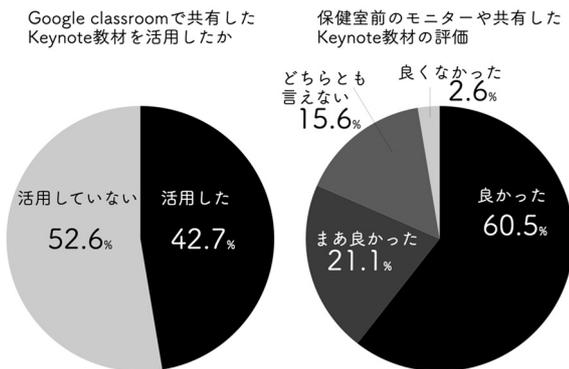


図2 アンケート結果

表4 回答例

### 【良かった・まあ良かった】

- ・生徒が、廊下や検査中に待つ間、視覚的支援ツールを見ることで、落ち着いて活動できたから
- ・見通しが持てた（教師も）
- ・学級内では今回の検診・検査に関して不安を抱く生徒がいなかったため使用していないが、気になる生徒に対しては見通しをもつのに有効だと思うから
- ・事前学習をよりよくできた
- ・実際の検診で使う流れカードと一致しているものだったので、より本番と同じ流れで検診の練習を行うことができた

事前指導が取り組みやすかった。スライドを活用することで、保健室と担任の指導内容の統一できるところが良いと思う

- ・歯科検診の際の動画は、帰り際に逆に刺激になってその場を離れがたかった気がします
- ・不安がつよい児童と一緒に確認して気持ちに準備ができた
- ・イラストがあって説明しやすい

### 【どちらともいえない】

- ・資格支援が不要だったため。検診が苦手な児童は、モニターがあることで不安になっている様子が見られた
- ・今回の生徒は特に視覚支援を必要としていなかった

### 【あまり良くなかった】

- ・教室で再生できなかった。理由はわかりませんがその時のWi-Fi環境かもしれません

#### 4. 養護教諭へのインタビュー結果

##### 1) 教員経験 15 年目の養護教諭 A

15 年目の経験を持つ養護教諭 A は、本実践以前から視覚支援の必要性を認識していた。養護教育に関する専門誌の情報から「検診の手順で使用する絵カードを動画のように流していくことをしていきたい」という意欲はあったものの、「1 学期の 4 月から 6 月はとても忙しいので、やりたいなと思いつつ、一步踏み出せていない状況でした」と、多忙な業務の中で実践のきっかけを掴めずにいたと述べた。

本研究の実践にあたっては、「不安はゼロです。やってみないとわからないので。踏み出してしまえばできると思い、このチャンスを活かそうと思いました」と、変化に対して極めて前向きな姿勢を示した。今回の「伴走型支援」という形が、その「一步」を踏み出すための機会になったことがうかがえる。特に、第一著者が初期の教材作成を担ったことについて、「どの仕事も同時進行でやってるから、先生が作ってくれてラッキーでした。やってみたら、それを貼り替えていけばいいって思ったら、すごい楽になったと思いました」と振り返っており、テンプレート化による負担軽減が、多忙な中でも実践を可能にした重要な要因であったことが示された。

実践後の成果については、まず「大人の流れがスムーズだった」と、教員側の支援体制の改善を挙げた。さらに、「うまくいかない子に、1 人大人がサポートできる少しの支援が積み重なることで、時間の短縮に繋がっていく」と述べ、児童生徒一人ひとりへの支援の質の向上が、結果として全体の時間的な余裕を生み出し、好循環になったことを指摘した。

一方で、単なる成功体験としてではなく、「子ども目線に立った時に、もちろん安心に繋がっているケースもあれば、先に不安がよぎる子もいる。大人の方で選択して見せてほしいなと思う」と、視覚支援が全ての児童生徒に有効なわけではないことも分析し、支援を提供する側の個別配慮の必要性を提言した。

最後に、今後の姿勢として「やらない自分より、ちょっとずつでも進んでいこうと思っている」と持

続的な成長意欲を示すとともに、本実践で得た知見を校外の養護教諭コミュニティでも共有していると語った。このことから、本実践が個人のスキルアップに留まらず、その成果をより広いコミュニティに還元しようとする、自律的かつ貢献意欲の高い実践家の姿が浮き彫りになった。

##### 2) 教員経験 1 年目の養護教諭 B

教員経験 1 年目の養護教諭 B は、デジタル機器の操作自体には習熟しているものの、それを教育実践に結びつける方法に課題を抱えていた。大学時代に卒業論文を iPad で執筆するなど、機器の操作に不安はない一方で、「普段の生活の中で『こういうのを使ってみよう』と思いつくのですが、自分が何をしたらいいか定かではないです」と述べ、具体的な実践方法への知識不足を感じていた。

そのため、本実践の開始にあたっては、「最初聞いたときは、できるのかなと思いました」と、不安を抱えていたが、テンプレートがあったことで「やってみたらそんなに負担はなかった」と振り返った。また、研修で学んだ内容を活用することで時間短縮になったことや、機材トラブルの際に著者がいたことで「助かった」と人的支援の重要性についても語った。

実践中の様子としては、「子どもが結構視覚支援の教材に注目してくれていました」と児童生徒の視覚支援への関心の高さを述べ、「担任の先生が視覚支援の教材を使って説明してくれたのは効果があったような気がします」と、学級担任との連携の有効性について言及した。同時に、「(子どもたちが保健室前に並んで入れ替わる)ペースがアップしてくると、見る時間が取れなくなったクラスもあった」という運営上の課題を指摘した。

今後の展望としては、全校生徒の書類やデータ管理を効率よくまとめるなど、より複雑な校務へ ICT を応用したいという意欲を示した。そして、本実践について、「きっかけがないとしなかったと思います」と、機会や環境が整備されることの重要性を述べた。また、同様の課題をもつ教員がいた際の助言として、「自分で分からないことは、わからないままで終わる可能性があるんで、周りや得意な先生に聞くことが一番の近道だと思います」と他者と協働することを強調していた。

## 5. 考察

本研究は、ICT 活用に不安がある養護教諭に対する「伴走型支援」を実施し、学校健診場面で有効な視覚支援教材の作成・活用ができるようになることを目指した。本考察では、「伴走型支援」による成果と課題を中心に考察した。

本研究で実践した「伴走型支援」は、単なる技術支援ではなく、①初期段階での協働と心理的負担の軽減、②テンプレートという教材作成の手がかりの提供、③実践中の継続的な人的サポートという複数の関わりを指していた。インタビュー結果から、この支援が経験年数やスキルの異なる両者に対し、それぞれの課題に合わせて極めて有効に機能したことが明らかになった。

### 1) 「伴走型支援」の成果

#### ①養護教諭Aの成果

経験豊富な養護教諭Aにとって、「伴走型支援」は「知っているが、できない」状況を打破するものとして機能した。元来、視覚支援の必要性を認識し、実践意欲をもっていたが多忙という業務上の制約が大きな壁となっていた。著者が初期の教材作成を担ったことは「先生が作ってくれてラッキー」や「すごい楽になったと思いました」という発言からも、技術を学ぶというよりは業務効率化の手段として価値があった。また、テンプレートの提供は「貼り替えていけばいい」という手軽さを生み、実践への心理的・時間的コストを下げた。つまり、養護教諭Aに対する「伴走型支援」は、教わる関係というより、互いの専門性を活かして協働という形で業務を効率化するパートナーのように機能した。これにより本来もっている専門的な知見を、形にする役割を果たしたと推察される。

また、心理的・時間的コストが下がったことから、この実践を、検診を受ける児童生徒、検診時に児童生徒を支援する教員、担任が回答したアンケート内容を多面的に分析し、今回新たに見出された課題を考えていることや、校内だけにとどまらず、広い範囲へと知識を還元しようとするのが窺える。

#### ② 養護教諭Bの成果

教員経験1年目の養護教諭Bにとって、「伴走型支援」は「何をすべきか分からない」という不安を

解消することに繋がった。BはiPadの操作自体は習得していたが、それを教育実践に結びつける方法論を知らなかった。テンプレートは単なる時短ツールではなく、教材作成の拠り所となる型そのものであった。「ベースがあったので当てはめるだけだった」という発言は、テンプレートが実践への道筋を具体的に示したと考える。さらに、機材トラブル時の人的サポートでは「一人では対処できなかった。

(第一著者)がいてもらえると助かった」と答えており、失敗を恐れずに挑戦できる環境であったことを示している。養護教諭Bに対する「伴走型支援」は、断片的なスキルやアイデアを、教育実践というゴールまで導くためのナビゲーターとしての役割を担った。インタビューの回答には見られなかったが、ICT活用自主研修会で取り扱った Split View (iPadの画面に2つのアプリを表示し、写真やファイルをドラッグして別のアプリにコピーすることができる)の機能の活用や、作成したスライドショーの時間を変更したり、画像を編集したりする方法を自ら著者に質問することがあった。視覚支援の教材を作成する際に、イメージを形にするにはどうしたら良いかを考えたことによる行動だったと捉えられる。また、今後ICTを活用してどのように業務に活かしていきたいか明確に答えていることから、自主的に児童生徒への有効な支援について考えたり、課題を見つけたりする姿へと変わりつつあると考える。

### 2) 共通の成果

「伴走型支援」は具体的な支援内容が決まっているものではなく、寄り添う相手によって支援内容が変化する。今回、養護教諭Aには専門性を尊重し、実践を効率化することで、養護教諭Bには不安に寄り添い、学びの段階を設計することで「伴走型支援」が機能した。このように、対象者の状況に合わせた支援の形を柔軟に変化させ、それぞれの障壁を取り除くことが「伴走型支援」の本質的な価値であると考える。一律の研修や支援では決して実現できない、効果的な教員支援のモデルであったと考える。

### 3) 「伴走型支援」の課題

#### ①養護教諭Aの課題

課題は2つあると考える。1つ目は、今回の教材作成を担ったのは養護教諭Bであり、養護教諭Aは

知見を提供してはいるが教材作成を行っていない。養護教諭間で協働をしてはいるが、A自身のICT活用指導力の向上に繋がっているか不明であった。2つ目は、「子ども目線に立った時に、もちろん安心に繋がっているケースもあれば、先に不安がよぎる子もいる。大人の方で選択して見せてほしいなと思う」と述べているように、個別のアセスメントに基づいて最適化する必要性を感じている。次の段階として、作成した視覚支援の教材を児童生徒に応じて、いつ、どのように活用するかを考えることである。

### ②養護教諭Bの課題

予測不能な事態に対応する自律的な問題解決と考える。技術的なトラブルなど計画外の事態が発生した際に、自力で乗り越える経験と自信がまだ不足していることが想定される。今後は、考えられるトラブルのシミュレーションを考えたり、あえて支援者が少し距離を置いて見守ったりするなど、意図的に自律を促すような伴走が必要と考える。

### ③ 共通の課題

今回の「伴走型支援」を通して、次の段階にステップアップした課題が明らかになった。養護教諭Aは幅広い実態がある児童生徒に共通する支援から、専門性を活かしてより個別最適化された支援へと発展させていくこと、養護教諭Bは自律した実践を促していくこと変わったと考える。「伴走型支援」が決まった介入ではなく、教員の成長段階に応じてその役割と距離感を柔軟に変化させていくことが必要であると考え。そのため、「伴走型支援」を実施する支援者は、対象者の実態や課題等を把握して、支援内容を考える必要がある。

## 6. 本研究のまとめと今後の課題

本研究は、知的障害教育部門と病弱教育部門を有する特別支援学校において、学校健診という場面で視覚支援が十分に機能していないという課題から出発した。その背景には、ICT活用への意識や多忙さから、専門性を有する養護教諭が効果的な教材を作成・活用する上で困難を抱えているという、多くの学校に共通するであろう問題があった。この課題に対し、本研究では一方的な技術研修ではなく、教員一人ひとりの状況に寄り添う「伴走型支援」とい

うアプローチを導入し、その有効性を実践的に検証することを目的とした。本研究の成果は、「伴走型支援」が経験年数やスキルの異なる養護教諭に対し、それぞれの課題に合わせて最適化された形で機能し、両者の専門性を高めることに寄与した点にある。養護教諭Aにとって本支援は、できない状況を打破するきっかけとして機能した。第一著者が初期作成を担い、テンプレートを提供することで、養護教諭Aが本来持つ豊かな知見をスムーズに実践へと移すことが可能となった。一方、養護教諭Bにとっては、何をすべきか分からないという不安を解消するものとして機能した。テンプレートは思考の型となり、トラブル時の人的サポートは、失敗を恐れずに挑戦できることを保障した。このように、対象者の状態に応じてパートナーとして機能したり、メンターとして機能したりすることで、スキル習得や校内の支援の質の向上に寄与したものと考える。

今後、さらに支援の質を高めていく上で、学級担任のアンケート結果の分析を行った。学級担任が「どちらとも言えない」と回答した3件の理由は視覚支援がなくても落ち着いて健診を受けることができたと回答していることによる。また、「良くなかった」と回答した1件の理由は「生徒がイラストでイメージしやすい。しかし、教室で再生ができなかった。理由はわかりませんがその時のWi-Fi環境かもしれません」というものであった。他の学級で活用できていることから支援方法や取り組みに対しての問題ではなかったと考えると、否定的な意見はなかったと結論づけられる。これは児童生徒の不安軽減と主体的な活動参加の促進に繋がったことを示している。

今後の課題は3つある。1つ目は養護教諭Bにとっては、著者の存在が支えになっていた一方で、依存を生む可能性も示唆している。前述したように、今後は自律を促していくために、考えられるトラブルのマニュアル化や、あえてすぐには介入せずに、本人に考えさせる時間を設けるなど意図的な関わりが重要である。2つ目は、取り組みの成果を最大化し、持続可能なものにしていくために、支援の対象を広く捉え直す必要がある。視覚支援の取り組みや教材に対しての肯定的評価は高いものの、Google classroomで教材を活用した割合は5割に満たな

い。活用しようと思ったが教室で再生できなかった学級もあった。校内の支援の質をさらに高めていくためには個人だけでなく、組織の仕組み作りへの構築が求められる。3つ目は「伴走型支援」を担う支援者自身のスキルや専門性の解明である。本研究が示したように、支援対象者のレディネス（経験年数、ICTスキル、心理的状态など）を的確に見立てるアセスメント能力や、役割を柔軟に変化させる適応力が養護教諭の成果に、そして校内の支援の質の向上に寄与できた。今後、「伴走型支援」の支援者にどのような力量が求められるか検討することも課題である。

### 注

注1) 本稿では、「検診」と「健診」の2つの言葉を用いている。「検診」は特定の病気に絞って、詳しく検査を行う場合に使用している。「健診」は各検診の総称として使用している。

### 文献

養護教諭及び栄養教諭の資質能力の向上に関する調査研究協力者会議「養護教諭及び栄養教諭の資質能力の向上に関する調査研究協力者会議議論の取りまとめ」(2023) [https://www.mext.go.jp/content/20230118-mxt\\_kenshoku-000026992\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230118-mxt_kenshoku-000026992_1.pdf) (最終閲覧日 2025.9.10)

陳依文, 吉利宗久(2023)「小・中学校の特別支援教育における養護教諭の役割に関する研究」『育療』第72巻, 11-19

文部科学省「特別支援教育におけるICTの活用について」(2020) [https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt\\_jogai01-000009772\\_18.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_18.pdf) (最終閲覧日 2025.9.10)

文部科学省「教員のICT活用指導力チェックリスト」(2018) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/05/17/1416800\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/05/17/1416800_001.pdf) (最終閲覧日 2025.9.10)